様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　３月３１日現在

研究種目：　基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：　18520366
研究課題名（和文）　各種専門分野における学術用語を表記する漢字に関する調査研究
研究課題名（英文）　Study on Chinese characters write scientific terms in various specialized fields

研究代表者
笹原　宏之（SASAHARA, Hiroyuki）
早稲田大学・社会科学総合学術院・教授
研究者番号：80269505

研究成果の概要：

学術用語における漢字のうち、とくに各種専門分野での常用漢字表外字や表外音訓に関する使用実態を把握し、その背景について共時的に、必要に応じて通時的にも検討し、漢字表記の増加傾向とその要因を明らかにした。個々の字には、形音義の各面で当該社会での体系性を整えようとする指向性を持つと解されるものが少なからず見出され、新聞や地名等の漢字との共通点と相違点が確認された。それらと新たな漢字政策や中国・韓国の漢字の状況などとの比較も行い、一般との関わりが深まっている現状も解明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	**1,100,000**	**0**	**1,100,000**
2007 年度	**1,100,000**	**330,000**	**1,430,000**
2008 年度	**1,000,000**	**300,000**	**1,300,000**
年度			
年度			
総　計	**3,200,000**	**630,000**	**3,830,000**

研究分野：日本語学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：文字　語彙　字体　異体字　音訓　常用漢字　表外字　医学

１．研究開始当初の背景

３年前の時点で、学術用語と漢字は、ともに政策、実際の使用のいずれにおいても大きな動きを呈しつつあった。そうした中で、それらの新たな様相に関する調査研究は十分になされていないという状況があった。

一般での漢字使用の目安を示す「常用漢字表」などで、適用されない分野であると明記されている「科学、技術、芸術その他の各種専門分野」にかかわる学術用語に関して、例えば「学術用語審査基準」では、原則として「常用漢字」で表記し、表外字は同音または同訓の漢字に書き換えるか、ほかの用語に言い換えるか、仮名表記にすることとされている。しかし、各分野では、学術用語の中に使いたいと希望する漢字、実際に使用する漢字が多数提示される状況が生じていた。

２．研究の目的

本研究においては、学術用語における漢字、ことに常用漢字表外の字種と字体、用法等に関する使用の実態を解明し、それらが必要とされ、生み出された理由について通時的な観点を加味しつつ捕捉を行うことを目的とする。内閣告示・訓令「常用漢字表」や国語審議会答申「表外漢字字体表」という漢字政策において適用除外とされる「各種専門分野」で使用されている字種と字体、音訓等の実態を明らかにし、その背景を探究する。

現行の「学術用語審査基準」では、「各種専門分野の事情に応じて、「常用漢字表」にない漢字を用いて表記することを妨げない」とも定められているため、仮名書き、交ぜ書きや言い換えは減少しつつあり、「常用漢字表」にない漢字や異体字、とくに略字の使用が顕著に認められるようである。それらは、当該専門分野において手書きを中心として高頻度で使われる煩瑣な字体の漢字と推測され、関係者が筆記経済を求めることで生まれ、その中で習慣化した字体であることなどが想定され、その実際についても明らかにする。

３．研究の方法

学術用語を表記するための常用漢字表外字を中心とする漢字について、実態を整理し、各種の情報を施し、字種、字体（異体字）、用法などの各面から現状を検討する。

その結果に対して、種々の分析を行う。なかんずくそこで用いられた字体に関して、新聞や地名等の固有名詞といった社会的影響力の大きな漢字使用群と、使用実態や個々の性質などについて比較を行う。新聞などのマスメディアで、活字として準備されているその種の異体字は、主に「見せるため、読ませるための文字」として、既存の字体を元に演繹的に作られた字体であると考えられる。

一方、地名等における異体字は、現実の文字生活の中で手書きされることによって生じたものと考えられるという点で、学術用語の異体字と高い共通性を持つと考えられる。それらについての比較、対照により、それぞれの性質と互いの共通点・相違点を見出し、略字が使われる背景を考究する。

合わせて、関連する漢字の中国、韓国等を含めた諸文献の類における使用状況等の調査研究を行い、日本ではいかなる場合に特徴的な漢字、異体字、用法やそれらにより表記される用語が発生し、なぜ定着ないし淘汰に至ったのかという原因に関して、比較、対照等を通じた考察を行う。

上記により得られた学術用語にかかわる漢字に関する調査研究の成果を、種々の方法により公開する。

４．研究成果

学術用語における漢字に関する使用の実態を把握し、それらが必要とされた理由について、通時的な観点を加味しつつ検討を行った。特に一般における漢字使用の目安を示す「常用漢字表」や「表外漢字字体表」において適用除外とされる「科学、技術、芸術その他の各種専門分野」の中で使用されている表外漢字・表外音訓に関する漢字、漢語などの実態を中心として量的、質的に明らかにし、その背景を探究した。

そこでは仮名書き、交ぜ書きや言い換えは減少しつつあるのに対し、「常用漢字表」にない漢字で、各分野で学術用語の中に使いたいと希望する漢字が増加しつつあり、実際に用語の表記に多数使用されている状況が具体的に明らかとなった。

それらは、各種学会の専門書、辞書類や専門誌はもちろんのこと、法令、行政・公用文書、教科書、新聞、雑誌、一般向けの書籍、放送、さらにインターネットなどを通じて、直接あるいは間接的に、一般の言語生活、文字生活に影響を与えていた。「同音の漢字による書きかえ」の作成時にも参照されており、その各方面への影響は多大であった。

そこには、字種、用法、表記などのほか、字体の面でも注目すべき事象が存在した。数多くの異体字、特に略字が使用されていたが、それらは、当該専門分野において高頻度で使われる画数の多い漢字であり、当事者が主に筆記経済を求めることで生まれ、その中で習慣化した字体であることが確かめられた。さらにそれらの多くは、位相的慣用音、位相的用法と合わせて、その社会での用字に体系性を整えようとしたものとみなすことが可能であり、新聞や各地の地名等の字体などとの間で共通点並びに相違点が確認された。

最新の新常用漢字案などとの比較や中国・韓国など他国の状況との比較、対照を通じ、一般とのかかわりの一層深まる情報化時代におけるこれらの現状と背景、意義についても、字種、字体（異体字）、用法などの各面から検討を加えた。

日本語学の分野において、専門用語の研究及び漢字の研究は、いずれも活発な状況を呈しているとは限らないという状況の中で、その双方にまたがる調査研究が実施され、さらに現実の施策にも一定の反映がなされてきた。今後の学術用語の補訂や新規の策定に当たっても、具体的に寄与するところがあるものと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６　件）

１　笹原宏之「自分の娘の謙称」『日本医事新報』4369 号　p101　2008.1.19（査読無）

２　笹原宏之「日本語の文字の表現性　－「薔薇」を巡って－」『月刊言語』（大修館書店）36-10　p56-63　2007.10（査読無）

３　笹原宏之「鼠蹊の語源」『日本医事新報』4321 号　p116-117　2007.2.17（査読無）

４　笹原宏之「「人」と「人間」の語源と使い分け」『日本医事新報』4317 号　p101

2007.1.20（査読無）

５　笹原宏之「常用漢字表と日常生活の漢字」『日本語学』（明治書院）25-11　p115-125 2006.9（査読無）

６　笹原宏之「「罹患」という語の最初の使用例」『日本医事新報』（日本医事新報社）4286 号　p100-101　2006.6.17（査読無）

〔学会発表〕（計　２　件）

１　笹原宏之「人々による漢字使用の差とその移り変わり」 2009.3.26　平成 20 年度　国語施策懇談会　文化庁

２　笹原宏之「学術用語と漢字」 2009.3.7 ＪＳＬ漢字学習研究会　早稲田大学

〔図書〕（計　２　件）

１　笹原宏之『訓読みのはなし』 2008.5（光文社新書）全 274 ページ

２　笹原宏之『国字の位相と展開』2007.3（三省堂）全 931 ページ

〔その他〕

１「日本の漢字　俗字」『東京新聞』2006.11.29

６．研究組織
(1)研究代表者

笹原　宏之（SASAHARA HIROYUKI）
早稲田大学・社会科学総合学術院・教授
研究者番号：**80269505**